ＮＯ．９　　平成１８年６月１６日

花を咲かせよう

文責　　須田

なかなか褒められない

「褒めましょう。」と言われても，なかなか褒められないものだと思います。私も若い頃は褒めるよりも厳しく叱ることに力が入っていたように思います。

褒めることを増やすようになってから，子どもの見方も変わってきました。そして，自分の傲慢さにも気づくことにもなりました。これは私にとってとても大きな財産となっています。

＜褒められない理由＞	→	見えていないものが見えるようになった自分
目標に達しない子どもが気になる。	→	目標達成した子どもだけをよい姿として見ていた自分
褒める内容が見つからない。	→	自分の視野の狭さに気づいた自分
褒めるだけの価値がない。	→	自分の評価観を押しつけていた自分

このことは，私だけのことではないように思います。子どもから学ぶとよく言われますが，自分の未熟さを感じる瞬間がなければ，いつまでも傲慢な自分でいたような気がします。
（自分で気づくか，人に気づかせてもらうか，どちらにしても努力なしには変わりません。）

子どもができるようになっていく過程に褒める内容がある。

目標に達していないから駄目だというのではなく，目標達成に向けて努力をしている姿にその子らしさが見え，その子の生き方に感動し，つい褒めたくなることはないでしょうか？子どものこの努力する生き方に触れると「褒める」という言葉は，傲慢に感じます。しかし，教師だからこそあえて褒めるのです。

何とかしたいと考えたときに褒める内容が芽生える。

手の打ちようのない状態では，子どもを褒めることは絶対にありません。そういうときよく耳にするのが「子どもが悪い。」「あの子なら仕方ない。」と子どもに責任を転嫁する言葉です。この言葉は，「次の指導の手が見えない。」と自らの指導力のなさをさらけ出している言葉に聞こえてきます。指導しようとしている時には，努力させているのですから，褒める姿が必ず見えてくるはずです。

指導の視点が広がれば，褒める内容も広がる。

「挨拶」一つでも，よりよい挨拶の仕方を求めていれば，褒める内容も豊かになります。先日，登校時に「先生，他の挨拶にしてよ。」と子どもから声をかけられました。(「名前を呼んで挨拶」は，できるようになるまで時間がかかるのでちょっといつもより長く続けていました。)そこで,「あなたは，どんな挨拶がいい？」と尋ねたところ「元気に挨拶」と答えてくれました。今,「元気に挨拶」を続けていると，新たに「遠くから挨拶」を発見することができました。「元気に」の次は,「遠くから」にしようと考えています。

子どもの可能性を信じれば，褒める内容が見えてくる。

子どもを固定的，断定的に見ていると褒める内容は見えてきません。「時間はかかるが，できるはずだ。」「この努力を続けていると,必ずできるはずだ。」と子どもの可能性を信じて指導し続けていれば，必ず褒める内容が見えてきます。本校の特別支援に関わる先生方の褒めることの多さに気づきませんか？これには，頭が下がります。先生方の努力の結晶だと思っています。ですから，先生方から学ぶことが多くあります。「一人一人を大切にしたい。」という思いが根底に流れているからこそ，その子の可能性にかけているのだと強く感じます。